

2008.4.26(土)~5.1(木)

## 槍ヶ岳 硫黄尾根

佐藤英明、塩見慶子、坂口光恵、五十嵐文彰

### 4日25日(金)アプローチ

佐藤英明

みんな仕事しているのに午前中で消える。ウシロメタイけど仕方ない。硫黄尾根と思うとウキウキするとか、緊張もする。自分もそうだけど、死ぬわけにはいかないし。

新宿駅のホームで16時の「あずさ」を待っていると、塩見さんが絹を裂いたような声とともに現れる。ビールとワインを買い込んで乗車に備える。

塩見さんが光恵さんに携帯をかける。八王子から赤ワインをボトルで買ってくるようにとの指示を出しているが、果たして、光恵さんは「そんなピンなんて売ってるわけなーだろっ」って乗ってきた。

八王子で4人が揃う。車内販売でも信州のハラモワインの白を買う。飲んで、飲んで、飲んでたら、松本駅に着いた。在来線に乗り換えて、長椅子に寝っ転がりながら、松本の女子高生の会話を聞く。サッカー部にイイ男がいるらしい。特に顔がイイらしい。

いつしか信濃大町に到着した。七倉荘にチェックインして、飲みに出掛ける。駅前の焼鳥屋だ。ネタがデカイのが取り柄だが緑色の豆腐も美味しかった。

3時起床、酒が残ってて気持ち悪りー。タクシーに乗って牛井の「すきや」に向かう。マイケルとイガは二日酔気味なんで、ご飯なんか喰えない。英明は牛井を喰う。マリーはミニカレーを喰う。

コンビニに寄って買い出ししたら、葛温泉のゲートが6時半に開くとのこと、初耳だ、全くの調査不足だった。今更、反省しても仕方ない、ダムの上まで歩く労力を考えるとアホクサ、七倉荘に戻って2度寝する。再びタクシーに乗って、ダムの上までスイスイ登ってしまう。唐幕がよく見える、左方ルンゼしごとく凍っている。

林道をタラタラ歩いて、山道に入って、晴嵐荘から懐かしのキタカマのルートに入る。少し悪い巻き巻きでから強引に硫黄尾根に上がる。尾根を辿ると次第に雪が多くなって、標高1900mを過ぎたあたりから雨が酷くなったのでテントに入る。

ガスをボンボン焚いて、濡れた身体を乾かす。お酒を飲んで、あれこれお話をして幸せな気分ですぐに就く。明日はいよいよ核心だなー。まー、どーにかなんだろー。

### 4月26日(土)晴れ/曇り/雨

坂口光恵

朝3時に起床しタクシーで牛井屋に寄り朝食を食べてから高瀬ダムの予定だったが、ゲートが開くのが6時半からだということで、牛井屋で半カレーを食べた



シュカプラと槍ヶ岳

だけで七倉荘に戻り、もう一眠りしてから出発。

寝たんだか、眠れなかったんだか、よく分からない感じのまま、高瀬ダムから林道を歩き出すと次々と車が追い越していった。通行許可を取った釣り人の車だ。

私たちは日が差したり時々小雨が降ったりする中を黙々と湯俣に向かって歩く。五十嵐さんは傘を差している。傘、持ってくるなんて余裕あるなあ、明日は共装持ってもらおう、などと思いつつ3時間弱で湯俣到着。

そこから水俣川左岸を20分程歩くと赤布発見。ここが取り付きかと思うが、英明さんが取り付きはもっと奥なのでは？というので、もう少し進んでみるが、それらしき場所が分からない。そこで登りやすそうな笹藪を窓に向かって直上すると、比較的短い時間で尾根に出ることができた。

春山らしく時々腐れ雪の落とし穴に落ちながらも明日からのことを考えてなるべく距離を伸ばし1900m付近に幕営する。

#### 4月27日(日)晴れ

#### 塩見慶子

朝方まで降っていた雨は止んだ。時々強い風が吹くも、樹林帯の中ではさほど感じない。雨で腐った雪が歩きづらい。2000mを越えて稜線上に出てもまだ樹林帯が続く。もう少し雪がついてくれれば簡単に通過できる雪稜なのに中途半端な雪付でなんだか

いやらしい。P1と思われるところでロープを出すがいきなりかぶった岩で重いザックで登れず、自分のザックを荷揚げする羽目になる。なぜかトップの英明さんだけが軽々と越えていった。

硫黄岳ジャンダルム郡は大小のアップダウンの繰り返しだ。それを丁寧にひとつひとつ越えて行く。今年は例年より雪が多いようだ。トポにはもろい岩稜と書かれているところもほとんどが雪稜になっていた。どちらが簡単で難しいのかわからないが、腐った雪に足をとられ、ズボッと沈むと思った以上に体力を消耗した。ルート上にはところどころに残置もあり、赤岳ジャンダルム郡より明瞭にルートがわかる。

最初はひとつひとつが楽しいアップダウンだったが、小次郎のコルを越えてもまだ硫黄岳が遠いにはがっかりしてしまった。すでに14時をまわっている。時々「ここに泊まろうか」との声も出るが、今日中に硫黄岳まで届かないと、明日以降の予定が苦しい。硫黄岳の急登で一部岩が出ていたが、非常に不安定な岩で緊張した。硫黄尾根は来る前から「脆い岩には気をつけて、ホールドが剥がれるよ」と注意をされたが、本当にそこに岩が置かれているだけで浮いているというのではなく乗っているだけ、触ってみるとカタカタしている。ちょっと力を入れるとボロッと剥がれて落ちる。なんて怖いところだ。やっとの思いで18時半硫黄岳に着いた。

硫黄岳の山頂は広々として気持ちが良いところだ



千丈沢に向けて懸垂下降

が、先ほどから吹き出した強い風で立っているのがやっただ。テントも飛びそうだ。ほとんど整地不要のところにてんを張る。早々に食事、そして明日の予定を話し合ってから就寝。明日は南峰に9時に着かないと、その先のジャンダルム郡の通過は無理だとか・いろいろと作戦会議をしたが、結局はなるようになれ・であった。

硫黄尾根は岩、雪稜、ルートファインディングと総合力を求められ、変化に富んだ素晴らしいルートでした。今回は天候や仲間にも恵まれて最高の登攀を楽しむことができました。メンバーの皆さんに感謝です。

赤岳ジャンダルム郡は雪のつきかたで全くといっていいぐらいにルートが変わり、トポとは全く一致せず、雪が不安定なうえに、本来しっかりしているはずの岩も浮いていたり乗ってだけの状態で、緊張の連続でした。また、大中小のピークが多く、はたしてどれがP1でどれがP2なの??と結局よくわからないまま、次の峰に取り付いていたり、次回また行く機会があっても絶対に今回と同じルートにはならないだろうと思います。それぐらい複雑でした。もう行きたくないという人もいましたが、チャンスがあればまた行ってみたいルートです。

**4月28日(月)晴れ**

**五十嵐文彰**

3時に起きると、昨夜の強風というか暴風も少し収

まっている。

硫黄岳から硫黄台地はとってもなだらかで、視界がないとルーファイが大変だろうと思うぐらいだっ広い。雷鳥ルンゼへの下降点はちょっと判りにくいけど、あんまり奥まで歩かず左手に稜線が見えるところのダケカンバがあるところが降り口。僕はいったん奥まで行ってしまい、英明さんにこっちだよと諭される。確保なしでも下降できるが、僕らはダケカンバを支点にして懸垂で降りていく。

60mくらい降りると支点のある岩場に出て右手に雷鳥ルンゼを拝むことができる。この支点から少しおりて、左に大きく屈曲し、そのまま下降していけば雷鳥ルンゼとなる。ルンゼに溜まっている浮石が凄くてロープ回収時に石をいっぱい落っことした。先にルンゼを降らなくて正解。

雷鳥ルンゼは最初だけロープを出せば、残りは緩やかなのでクライムダウンで降りられる。あんまり降り切らないうちに左側の稜線目指して登ると近道。僕はさっさと行き過ぎてしまい、後続と離れてしまった。後続は下まで出て登り返してきたが、その方が確実なルート。近道はちょっとトラバったりして多少いやらしい。

登り返し、稜線ぞいに少し登ると南峰に出る。ここは広くてテン場にも良い。思ったより行程は前倒しで進んでおり、今日は赤岳ジャンダルム群に進めそうだ。ここからP1~P8までまだまだ針峰が延々と続く。

アーベント・ロートの槍ヶ岳



赤岳を越した中山沢のコルが本日の目指すテン場だ。先は長い・・・

南峰を降る時、油断してすっ転び、右手のひらを思いつきり擦り剥いてしまうが、特に問題なし。ジャンダルムはひたすら登ったり降ったりトラバースしたりとなかなか難儀なルート。先行者のトラックもなく、ルートファインディングもかなり大変だった。

懸垂時にロープが回収できないことが2回もあった。1回目は大したところじゃなかったので、おいらがへこへこ登って結局フリーで降りてきちゃったが、2回目は確かP6からの懸垂だったからとっても大変であった。反対側の登り斜面から塩見さんたちが見るところ、どうもすぐそこで引っ掛かっているようだが、壁がちょっと立っていて、おまけに足元がザレザレなんでチョー怖い。英明さんに確保してもらって冷や汗タラタラ流しながらやっとの思いで回収。一時はこれで遭難？というナイトメアが頭をよぎったが、ほっと一息。

この先も少し前進するが、先が見えずなかなか厳しそう。まあいろいろあったし、今日は陽の高いうちに寝床作りということで、P6とP7の間のコルにテントを張る。テントから見る北鎌のアーベントロートが美しかった。

#### 4月29日(火) 晴れ

#### 佐藤英明

テン場は、岩塔と岩塔の間のコル、両側が大袈裟に言うところ絶壁、しかも狭い。テントを撤収しないと、トイレに行けないので、案の定、朝はトイレ(人から見えない場所の)争奪戦になる。

昨日の夕方、2ピッチほどザイルを張っておいたので、まずはそいつを辿る。ナイフリッジから岩と氷と雪のミックスを越えるが、その後の急なクライムダウンとトラバースが恐かった。支点がなかなか見つからなくて右往左往するが、雪を掘りまくっていたらハーケンがあった。

次のピッチ、細いリッジを越えると頭上に窓が見える。窓を抜けると懸垂の支点があった。50mの懸垂で中山沢のコルに降りる。どうも赤岳というのは赤岳針峰群全体を指すようだ。我々は6峰と7峰の間にテントを張って7峰と8峰の間を懸垂して来たようだった。

しかし、まだまだ、核心は終わらない。目前に赤岳本峰群と呼ばれる巨大な雪壁が見える。この壁を3ピッチで越える。

そこから暫く、ノーザイルで進むが、じわじわとナイフリッジになってきて、だんだんと恐ろしくなってきた。自分達のトレースを振り返ると、ありゃザイル出すべきだったなーって少し思う。そこから先も切れ味鋭い雪庇を右へ左へと乗っ越しながら辿る。

そして、とうとう、転んでもどこにも落ちそうにもない広い雪原に出る。夢にまで見た「白樺平」だ。



早速テントを張って宴会に突入する。今日は非常食なのでマルタイ棒ラーメンがメインディッシュとなる。マルタイ棒ラーメンを美味しく食べるコツは茹で過ぎないことだ。博多ラーメンの硬さには カタ、バリカタ、ハリガネ、粉落としての4段階がある。マルタイは、ハリガネがちょうどイイ。

夕陽に輝く槍ヶ岳が美しい。三俣方面が月光で仄青く輝いている。夜空には星がいっぱいいた。それにしても明日のラインもなんとなく厳しそうだ。

#### 4月30日(水) 晴れ

坂口光恵

白樺台地までは長かったような短かったような・・・とにかく目の前の急斜面の2つのピークを越えれば西鎌だ、と勇んで出発するが、朝一番で体が固い上に連日の2時起きで疲れていたのだろう。朝の硬く締まった雪のトラバースに思わず泣きが入り私だけロープを出してもらおう。ロープがあるとこれだけ体の動きが違うものか。ロープさままだ。

1時間強で西鎌尾根に出ることができた。しかし西鎌に出れば楽になると思っていたがそう甘いものではなかった。簡単に越せると思った雪のリッジが予想以上に難しかったり、見たところロープが無ければ駄目だと思ったところが全く問題なく通過できたり・・・

硫黄尾根は、岩稜の登下降がメインになると思っていたが、今年は雪が多いのか、雪稜通過のよい勉強に

なりました。春の暖かい青空の下、右手に双六から鷲羽の堂々とした稜線(三俣山荘がよく見えた。)左手に越えてきた硫黄尾根、目の前にはどんどん大きくなる槍ヶ岳。これは一生の思い出だ。

千丈乗越からはそれらともお別れ。誰も居ない飛騨沢を時々尻セードを交えながらなるべく疲れないように下降するが、予想外のところで穴に落ちたりして消耗しまくる。槍平小屋でお正月のデポ品を回収した後、ヨレヨレになりながら新穂高に無事辿り着くことができた。

<まとめ>

佐藤英明

北鎌レベルを想定していたのですが、もう少し厳しかったです。全体を通じて、先が読みにくいリーフアイ、頼りにならないトポ、赤くて脆い岩など緊張の連続でした。ザイルを伸ばしても登り着いたその先は眼下絶壁といったシーンが何度もありました。脆弱な支点からスタートしてノープロテクションで延々と50mも伸ばすのは、パーティー壊滅のシーンを想起させ、昨年の剣R4にも似てなんとも不気味でした。

そろそろ気を緩めてもよいハズの白樺平から西鎌尾根までも、ミスの許されない雪壁やナイフリッジが続きました。一般道の西鎌尾根すら間違っただらアウトの状況が延々と続き、ほんとうのほんとうに緊張から解放されたのは飛騨沢を沢床まで降りてから



のことでした。

連日18時過ぎまで行動、22時過ぎ就寝、深夜2時起床、4時半行動開始といった厳しさでした。久々に真顔で奮闘させられた登山でした。

### <アプローチ>

前夜は信濃大町の焼鳥屋。未明、ダム上までタクシーが入るのを知らないで、気合を入れて3時起床、葛温泉に向うも、ゲートが6時半オープンというので、宿（七倉荘）に戻って二度寝する。

仕切り直して、ダム上までタクシーで入って、湯俣の林道を延々と歩く。キタカマ方面と別れて硫黄尾根に取り付く。藪がヒドイが、次第に雪尾根になる。春特有の腐れ雪のラッセルに息があがる。

雨が降ってきたので15時前には切り上げて、テントに入って着衣を乾かす。

### <硫黄岳 ジャンダルム群>

P1からP6までであるが、1と2は・・・何気なく通過、3、4、5、6と何回かザイルを使った・・・ような気がします。しかし、核心は硫黄岳の登攀でした。

小次郎ノコルまで急下降して、激しく登り返すのですが、雪壁と馬乗りナイフリッジ何度か現れてシンドかったです。

### <赤岳 針峰群>

古い記録には、P1からP8を経て赤岳に至るとあるが、どうもP7とP8が赤岳そのもののようです。

P7のナイフリッジ登攀中、2ピッチ伸ばしたところで先き行き不透明のため、ザイルをフィックスしてコルまで戻ってテントを張りました。

狭いコルは、前も後ろも滑ったら果てしなく遠くまで落ちてしまう急なルンゼのためトイレ用のザイルすら張りました。

### <赤岳 主峰群>

P1からP5まであります。巨大な壁状のP1は3ピッチ、次いで、やたらにぶっ立った感じに見えるのがP2、そして、P3以降・・・トゲトゲ・ツンツン感はなくなるものの、ナイフリッジ状が続いて神経使いました。

辿り着いた白樺平は、久々に転げても、何処にも落ちそうにない心穏やかな場所でした。すっかり緊張から解放されて、ふにゃふにゃに気分になっていたのですが、翌朝、ふにゃふにゃ気分は全くの間違いだったと思い知らされました。

西鎌まで外傾したランベ状の急雪壁が続き、何ピッチかザイルを出す嵌めになりました。ここまで来ちゃえば、と思った天下の西鎌も両側が切れ落ちたナイフリッジが何度も現れ、全く気が抜けませんでした。

中崎尾根のジャンクションを過ぎて、飛驒沢下降点に到着。尻セードを交えてスッ飛びで下降しました。大量の岩ひばりが、群れ飛んでいました。



ミックス壁の登攀



三俣蓮華岳



硫黄岳への登高